

おいでんせえ・^{ようざん}養蚕のふるさと 大屋蔵垣かいこの里



文化財ミニパンフ

養父市立上垣守国養蚕記念館 平成7年開館

養父市立かいこの里交流施設 平成17年開館

大屋町蔵垣に“かいこの里”があります。ここには^{うえがきもりくにようざん}上垣守国養蚕記念館、かいこの里交流施設、かいこ飼育所などがあります。養父市大屋は江戸時代から昭和まで兵庫県下で最も養蚕が盛んな町で、関西地方で最も養蚕文化が栄えました。このため但馬の養蚕文化を後世に伝承し、養蚕の神様と言われた上垣守国翁を顕彰しています。

上垣守国養蚕記念館は、養父市で多く作られている木造瓦葺、3階建の養蚕農家住宅です。3階の高さがやや低い^{ちゅうさんがい}中三階と呼ばれる3階建養蚕農家を伝統工法で新築しました。1階は住宅、2階と3階が養蚕場になります。

主屋は瓦葺3階建であり、正面にあたる桁行が五間半、側面にあたる梁間が四間です。大屋根の上には抜気と呼ぶ^{こしやね}越屋根があります。この主屋には付属して牛小屋があります。牛は農作業に必要な労働力で、主屋に接して牛小屋を配置し、家族のように寝食を共にしました。瓦葺平屋建で正面の桁行二間、梁間二間です。

玄関は幅が^{にけん}二間あり、その内の^{いっけん}一間が大戸になっており、その中に障子を貼った引戸があります。主屋の戸口横には小便たんごがあります。土間の右側には田の字形に4部屋があります。正面側がみせとおもて、裏側がいろいろのある居間とちょうだいになります。おもてには正面に向かって右側に仏壇があり、上垣守国翁をお祀りしています。養蚕時にはみせとおもては畳をおこして床板を出し、桑置き場に利用しました。みせと居間と土間の間にある柱が大黒柱です。26cm角のケヤキの大黒柱です。この大きさの大黒柱は庄屋クラスで、一般の農家では18cm前後でした。

かいこの里交流施設は、抜気の付いた瓦葺平屋建の建物です。内部には土間と畳間、調理場、トイレがあります。交流施設では蚕の繭で作った繭人形などを販売しています。桑の葉うどんやコーヒーなどの食事もできます。また季節に応じて写真展や雛人形・五月人形などの特別展示をしています。

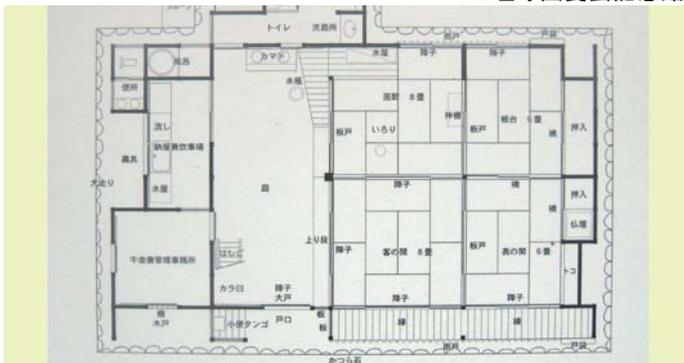
敷地内のかいこ飼育場では毎年5月20日頃から養蚕をはじめます。6月15日頃に蚕がすがいて^{じょうぞく}上簇（繭を作る）します。その後、一週間ほどで繭を取ります。これらの施設は、蔵垣区の“かいこの里の会”が養父市の指定管理者となって管理運営しています。記念館は水曜日から日曜日、交流施設は土曜日・日曜日の開館です。



上垣守国養蚕記念館



かいこの里交流施設



記念館の間取り図



交流施設の小屋組

3階建の養蚕農家住宅

農家では米作りや麦作りなどの他に、副業として養蚕や炭焼きをしました。明治時代中期から昭和前半にかけて、養蚕に適した養蚕農家住宅が多く作られました。養父市を中心に但馬地方に広がっています。

養蚕をするために新築や改築をされた瓦葺3階建の農家住宅を3階建養蚕農家住宅と呼んでいます。3階建養蚕農家には2種類あります。3階正面の壁面の高さが1.0 m程度の中三階と、2.0 m程度ある三階屋です。養父市内には現在でも中三階が約250棟、三階屋が約200棟、合計約450棟あります。養父市の養蚕農家の外観的な特徴は3階建、大壁、掃き出し窓、抜気などが存在することです。大屋には多くの養蚕農家住宅があります。

住居と蚕室を兼用した農家住宅

養父市の3階建養蚕農家住宅は、明治時代後期に養蚕をするために特別な形で発達した住居と蚕室を兼用した住宅構造をもつ建物です。養蚕には清温育という方法があります。室内温度を暖めて蚕を飼育する一方、風通しをよくして一定の温度を保つ方法です。室内温度を効率的に管理するため、人と蚕が同じ建物で生活しました。室内には、蚕が桑の葉を食べるザワザワとした音が響きました。

養父市では養蚕のことを「かいこ飼い」といいました。そして米作り以上に養蚕に熱心な農家を養蚕家と呼びました。繭の生産量は昭和2年では、一戸平均で40貫(150 kg)から50貫、大きな農家は100貫(375 kg)以上の繭を生産しました。集落の裏山にある里山の多くは桑畑でした。

屋根の形

3階の大屋根の多くはハの字に開いただけの切妻造です。屋根は瓦葺が基本ですが、豪雪地帯では鉄板葺もあります。またそれ以前には板葺や杉皮葺もありました。3階建になると壁に雨が当たるため、2階と3階の間に小庇を取り付ける場合もあります。そして屋根の上には、小さな切妻屋根の越屋根がつきます。これを養父市では、抜気と呼んでいます。

大壁と掃き出し窓

柱を壁で塗り込める場合を大壁、柱が見える場合を真壁と呼んでいます。養蚕農家は、1階は真壁で、2階と3階は大壁になっているものが基本です。寒い地方で蚕を飼育するためには、外気の影響が少なく温度管理に適した大壁が必要です。換気が必要な時には床まである大きな掃き出し窓を開いて一度に外気を入れることができます。外壁は下塗と中塗をした場合と、その上に黄色の漆喰で上塗りをする場合があります。



上垣守国の墓所から見た蔵垣



かいこの里入口



上垣守国養蚕記念館の3階外観



養蚕記念館のみせとおもて



桑の葉を食べる蚕



交流施設のいろいろ



交流記念館で製作販売しているまゆ人形



養蚕記念館の土間

上垣守国

宝暦3年(1753)～文化5年(1808)

上垣守国は、明和7年(1770)18歳から先進地であった現在の福島県伊達市に行き、蚕種を持ち帰って蚕種改良に尽力しました。寛政9年の記録では、伊達郡伏黒村藤屋の佐藤与惣左衛門家で103枚の蚕種を仕入れ、代金は金9両50文を支払っています。天明3年からは蔵垣村の庄屋を務めました。このため蚕種の買い付けは弟の上垣宇右衛門に任せました。そして享和3年(1803)、48歳の時に養蚕秘録という養蚕の技術書を出版しました。

養蚕記念館では、上垣守国の業績をたたえて養蚕秘録や上垣守国が使用した煙草入れ、矢立などを展示しています。また珍しいものに鯨魚石があります。寛政8年上垣守国が筏村で採集しました。石材には、寛政八歳、仙栄堂主人守国、筏邑の催壤山の下で拾得したと刻んでいます。これは長さ21cm、幅4.5cmの石材で、弥生時代に朝鮮半島から伝わった挾入柱状片刃石斧です。上垣守国は但馬で最初に古代の遺物を採集した考古学の先駆者でもあります。

養蚕秘録

養蚕秘録は、上垣守国が享和3年(1803)に発刊した上中下の3巻の養蚕技術書です。全部で83丁あります。上巻で養蚕の起源を述べ、蚕名、蚕種、栽桑、蚕飼道具を図解し、中巻では養蚕の実務を述べ、孵化、掃立、給桑、上簇、繰糸などの全般を解説し、下巻では真綿製法、養蚕の話題を書いて、和漢の古書25点を引用しました。当時は文字が読めない人も多いため、大きな挿図を多数入れて、図を見るだけで養蚕が学べるようにしました。出石藩の儒学者桜井篤忠の手助けによって、江戸・大阪・京都の書林から刊行しました。

文政12年(1829)、オランダ東インド会社のシーボルトは、養蚕秘録を日本からオランダに持ち帰りました。フランス政府は、オランダ王室通訳官ホフマンにフランス語訳を命じ、嘉永元年(1848)にパリとトリノで農業技術書として出版されました。日本の技術輸出第1号であると評価されています。日本国内でも、明治20年(1887)代まで80年以上にわたって出版され続けました。

宝幢寺にある上垣守国の紀蹟碑

明治40年(1907)10月10日、上垣守国没後百年を記念した上垣守国翁百年祭が、蔵垣にある菩提寺の宝幢寺において開催されました。養父郡長小林正義が発起人代表となって、県立蚕業学校長藤島盈文、県養蚕技師山崎条蔵らが企画しました。当日は1000人を越す人々が集まりました。養父郡内から募金を募って郷土の偉人である上垣守国の業績を偲び、上垣守国の業績を讃える紀蹟碑を建立しました。上垣守国の紀蹟碑は、出石の桜井勉氏の撰文、題字は兵庫県知事服部一三氏によって明治42年10月に宝幢寺に完成しました。現在も宝幢寺境内の一角にひっそりと建っています。

時期	上垣守国の事跡
宝暦3年	1753 蔵垣村に誕生する。上垣伊兵衛という。
明和7年	1770 4月に陸奥福島で蚕種を仕入れ、大屋谷養蚕の原種とする。18歳。
安永元年	1772 養蚕業を但馬と丹波、丹後に普及させる。
天明3年	1783 蔵垣村の庄屋となる。
天明5年	1785 弟 上垣宇右衛門に陸奥行きを代行させる。
寛政8年	1796 上垣守国が、筏村で鯨魚石を拾う。
寛政9年	1797 出石藩の許可を得て気多郡奥佐野村納屋に蚕室を設けた。屋号を仙栄堂として、蚕種紙の製造販売や絹糸を販売する。伊達郡伏黒村藤屋の佐藤与惣左衛門家で103枚の蚕種を仕入れる。代金は金9両50文であった。
享和2年	1802 養蚕秘録3巻を著す。48歳。
享和3年	1803 養蚕秘録を出版する。出石藩主仙石侯に書を献じ米を賜う。水害のため奥佐野村の蚕室を撤去し、蔵垣の自宅で蚕種製造する。
文化5年	1808 8月19日病にて死去。56歳。
文政12年	1829 オランダ東インド会社のシーボルトが、養蚕秘録をオランダに持ち帰る。
嘉永元年	1848 フランス政府が養蚕秘録をフランス語訳し、パリとトリノで出版する。その語イタリア語訳される。
明治16年	1883 近畿中国四国一府十三県連合会繭糸織物共進会で農商務大臣西郷従道より追賞証を授与される。
明治22年	1889 兵庫県繭糸共進会で兵庫県令内海忠勝より追賞状を授与される。
明治30年	1897 八鹿村に兵庫県立簡易養蚕学校が創立され、教科書に養蚕秘録が採用される。
明治40年	1907 上垣守国翁百年祭を蔵垣宝幢寺で挙げる。
明治42年	1909 宝幢寺に上垣守国紀蹟碑を建立する。
昭和25年	1950 大日本蚕糸会兵庫県養蚕連合会が、上垣守国没後の150年墓前祭を行う。
平成7年	1995 大屋町、上垣守国養蚕記念館を開館する。
平成17年	2005 養父市、かいこの里交流施設を開館する。

上垣守国の事跡



養蚕秘録 蚕棚の図



養蚕秘録 守国、採桑を口授す



宝幢寺にある紀蹟碑



守国が発見した鯨魚石

● かいこのモニュメント

蔵垣の県道には、大きな蚕のモニュメントがあります。上垣守国養蚕記念館、かいこの里交流施設の案内板です。足の短い白くて大きな蚕が空を飛んでいるようにも見えます。養蚕の里、蔵垣の風景となっています。



かいこのモニュメント

● 上垣守国のお墓

守国のお墓は蔵垣下の山裾の墓地の中にあります。文政4年2月に建てられました。墓石の正面に「上垣守国墓」と書いてあります。墓石の上には、唐破風付の屋根を形どった石材が置かれています。ここからは、天滝の一部が見えます。戒名は随真院栞嘗聞廣度居士です。栞は桑のことで、養蚕の誉れ高い人という意味です。



上垣守国翁の墓所

● 蔵垣1号古墳

蔵垣の集落の中に、道路に面して3段の岩が重なった石垣があります。道路の端には蔵垣1号古墳と刻んだ石碑があります。この石垣は、7世紀中頃に作られた古墳の横穴式石室です。古墳の盛土が無くなって石材が露出したものです。石室の石材を後側から見えています。この古墳からやや離れた南側に上垣守国の住居がありました。



蔵垣1号古墳

● 大屋の養蚕の先駆者

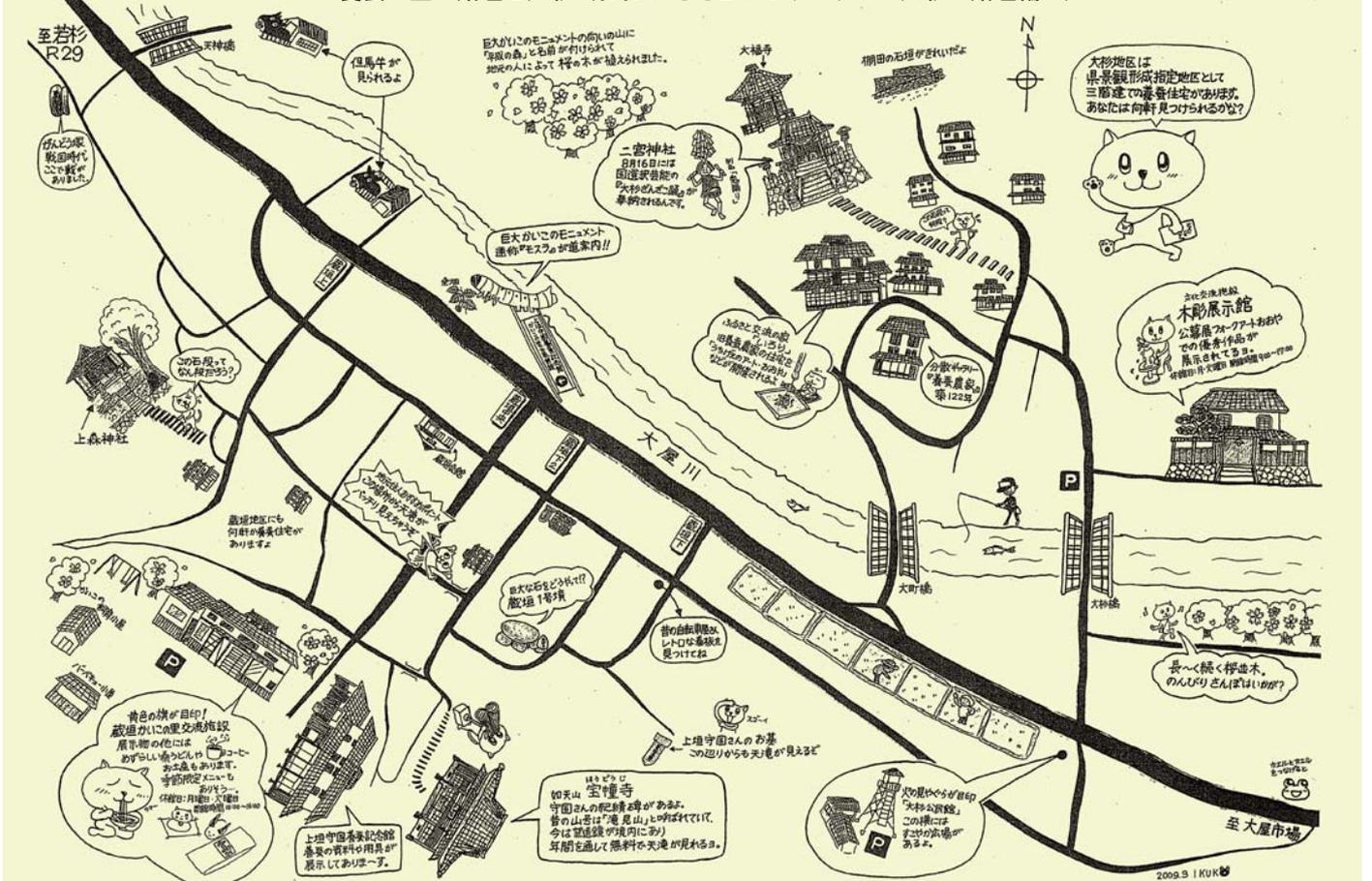
糸原村の正垣半兵衛（1770 - 1847）は、上垣守国の感化を受けて28年間に渡って奥州の蚕種を買い付け、養蚕振興に尽力しました。そして東山（大屋富士）山麓に桑畑3000歩（約1町）を開墾しました。文政2年に出石藩主仙石久利侯は、帯刀御免、御用達を仰せ付け、三人扶持の禄を与えて功績を讃えました。

古屋の小倉寛一郎（1858 - ）は、明治10年19歳で古屋に独力で盛業製糸場を創設しました。明治14年5月には12馬力の蒸気動力によるボイラーを設置し、器械製糸を開始しました。ボイラーは国内では生産できる会社がなく、横須賀工廠に発注しました。明治22年まで操業しました。兵庫県における器械製糸の先駆者です。

● 大杉の兵庫県景観形成地区

平成13年大杉地区は3階建養蚕農家をテーマに兵庫県景観形成地区になりました。3階建養蚕農家を利用したふるさと交流の家（平成4年）、栃尾家住宅を利用した木彫記念館（平成16年）、3階建養蚕農家を利用したギャラリー養蚕農家（平成20年）などがあります。ふるさと交流の家では毎年6月に「うちげえのアート」が開催されます。

養蚕の里・蔵垣と大杉（おおよえとこじゃマップー大杉・蔵垣編一）



編集：養父市教育委員会社会教育課 0100924

発行：かいこの里交流施設 667-0321 兵庫県養父市大屋町蔵垣 246-2 電話 079-669-1580